



五高本館

高等学校の寄宿舎にはいった夏の末の事である。明けやすいというのは寄宿舎の二階に寝て始めて覚えた言葉である。寝相の悪い隣の男に踏みつけられて目をさますと、時計は四時過ぎたばかりなのに、夜はしらしらと半分上げた寢室のガラス窓に明けかかって、さめ切らぬ目にはつり並べた蚊帳の新しいのや古い萌黄色が夢のようである。窓の下框には扁柏の高いこずえが見えて、その上には今日ぞめたような裏山がのぞいている。床はそのままに、そっと抜け出して運動場へおけると、広い芝生は露を浴びて、素足につっかけた兵隊靴をぬらす。ばったが驚いて飛び出す羽音も快い。芝原のまわりはれていた。その時計台を染めてる夜自分は妙なぼろな月光を浴びる。四方は薄絹に包みこむように包みこむ。自分と並んで一人若い女が歩いている。世の人と思われぬ青白い顔の輪郭に月の光を受けて黙って歩いている。薄鼠色の着物の長くひいた裾にはやはり月見草が美しく染め出されていた。どうしてこんな夢を見たものかそれ。は今考えてもわからぬ。夢がさめてみるとガラス窓がほのかに白んで、虫の音が聞こえていた。寝汗が出ていて胸がしぼるような心持ちであった。起きるともなく床を離れて運動場へおりて月見草の咲いているあたりをなんべんとなくあちこちと歩いた。その後も毎朝のように運動場へ出たが、これまでにここを歩いた時のような爽快な心持はしなくなった。むしろ非常にさびしい感じばかりして、そのころから自分は次第にわれとわが身を削るような、憂鬱な空想にふけるようになった。自分が不治の病を得たのもこのころの事であった。



小松原が取り巻いて、すみのところどころには月見草が咲き乱中を踏み散らして広い運動場を一回りするうちに、赤い日影が賄所の井戸が威勢よくきしり始めるのであった。そのころあ夢を見た。ちょうど運動場のようでもっと広い草原の中を歩いて現ともなくさまようていた。淡い夜霧が草の葉末においてまれたようである。どこともなく草花のような香がするが何のぬ。足もとから四方にかけて一面に月見草の花が咲き連なっている。



寺田寅彦随筆集「月見草」より

剛毅朴訥の 青春群像を 見守って百年。



10月10日、五高開校百周年記念祭が開催される。
明治20年開校から昭和25年まで64年間に
13,215名の卒業生を出して第五高等学校は終焉した。
赤煉瓦の本館や武夫原がそのまま残っているだけである。